

こごみ日和76

特集：急増する観光客の陰で…ごみはどうなってるの？

特集2：今や、宵山は“リユース”が当たり前
5回目を迎える「祇園祭ごみゼロ大作戦」

Hand in Hand：祇園を愛する人々と地域住民のためのまち
～ごみを捨てないで！マナー看板に込めた思い～

なごみ日和：このマップ、京都のJKが作りました
(DKもいるでー！)

KBS京都アナウンサー 海平 和



人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第5回：
修理から洗浄まで、革製品を甦らせる

靴専科

地域活動レポート：「せっけんづくり」はワクワクの宝庫
～出水地域ごみ減量推進会議～



世界に誇れるお祭りをつくりあげようと
集いしボランティアスタッフたち
青いTシャツの胸にはリユースマーク
目指すは、祇園祭をごみゼロに！

ごみにまつわるこの数字なあに？
ペットボトル消費量の**0.2%**
その影響は？

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

🔍 京都 ごみ減

検索

急増する観光客の陰で… ごみはどうなってるの？

観光客が急増する伏見稲荷大社

街を歩けば、トランクを引っ張る外国人やスマホや地図を手に、目的地を探す人と行き交う…。京都の街では、こんな風景が日常になった。観光客でごった返す人気の観光スポットや最寄りの駅周辺ばかりか、人影まばらな裏通りでさえも。

海外から、また、全国から訪れる観光客は年間5,522万人（平成28年京都観光総合調査（京都市））、3年連続で5,500万人を超えている。

人の営みには、ごみが伴う。とくに現代においては、便利さと速さの代償ともいえるごみが無意識に排出される。観光客の増加に伴ってポイ捨てなど、問題がないのか？ごみを受け入れる対策があるのか？まずは現状を知ることからと、情報を求めてあちこち訪ねることにした。

「空き缶条例」をきっかけに まちの美化への体制が整備

散乱ごみをはじめ、不法投棄の対策などまちの美化を推進する業務を託された、京都市環境政策局まち美化推進課のドアを押した。担当者は「以前に比べると、観光地等の散乱ごみはかなり減少しました」とのこと。

ここで時計の針を37年前に戻すとしよう。観光地では自動販売機が急増。同時に空き缶のポイ捨てが目立ち、地域

では大問題に。地域住民や研究者などの働きかけもあり、昭和56年「空き缶条例」^{※1}が制定され、空き缶等の散乱防止と再資源化を促進するとともに、事業者、販売業者の責務を明確にし、自販機の届出や回収容器設置及び管理を義務付けた。また、この条例に基づき、事業者、販売業者や観光関係業者により構成され、まちの美化の取組を実施する共同事業者が全国に先駆けて生まれたのである。

※1…正式名称「京都市飲料容器の散乱の防止及び再資源化の促進に関する条例」

事業者、市民、行政の共同で 大規模な美化活動を展開

この遺伝子は、現在「京都市まちの美化推進事業団」（平成14年発足）という組織に受け継がれ、散乱ごみのない美しいまち・京都の実現を目指し、京都市と企業、団体が協働で美化活動を行っている。

美化推進強化区域を中心とした定期的な清掃活動をはじめ、昨年度、取組開始20年の節目を迎えた、京都市と同事業団の実行委員会形式により市民の参加を得て行っている大規模な「世界の京都・まちの美化市民総行動」等の美化活動の輪は広がり、現在では年間延べ20万人以上の方

が参加されている。また、清水寺周辺、嵐山などの観光地には324基のごみ箱が設置され、京都市が毎日回収し、クリーンセンターで、分別処理されている。平成28年は年間346トンが回収され、内29トンが再資源化された。



京都市のごみ箱はスチール製（90リットル）

「空き缶条例」に端を発した、散乱ごみのないきれいなまち京都はしっかり根付いているようだ。

伏見稲荷周辺で今新たなごみ問題

清水、嵐山付近など、定番の観光スポットは、美化が行き届いているかもしれない。では、他の地域はどうか。世界の旅の口コミ情報サイト「トリップアドバイザー」で

近年、上位にランキングされ、観光客が押し寄せている伏見稲荷大社周辺の状況を知るため、伏見稲荷の近くにお住まいで、地域活動に尽力されている方々にお話を伺った。

席に着くなり「ほんまにいろいろあって、何から話していいやら…」と、ごみの現状に戸惑いを隠せない様子。

JR稲荷駅、京阪伏見稲荷駅から大社に続く道路沿いには、土産物店や飲食店が立ち並ぶ。多くの人が行き交う裏参道に入ると、たこ焼き、焼きそばなど露店が続く。食べ歩きしながら、大社へ向かう観光客が少なくない。

露店商が串や容器を回収したりもするが、道路の端や建物の隙間に捨てられる物も数知れないと言う。京阪伏見稲荷駅近く、稲荷橋横の小さな広場では弁当を食べる観光客

も多く、よくごみがポイ捨てされているようだ。お店のそばに置いていた自動販売機の資源ごみ箱の横に、ごみを入れたポリ袋が山積みになって困り果て、「投棄されるごみを捨てられるたびに自分で処理をしている」と話すのは、宇野喜貴さん。ごみの散乱を防ぐための究極の自主防衛策と言える。



自動販売機のそばに捨てられたごみ



左から宇野喜貴さん、中村佐敏さん、北野信義さん

地域の人々の話し合いが 問題解決の第一歩では

数年前までは祭りのときに限って参道に露店が並んだ。ところが近年、連日、露店が営業をするように。夕刻、露店が営業を終えた後、その日排出されたごみは、透明ポリ袋に入れられ、裏参道沿いに置かれる。分別はされていない。数時間後、業者によって回収される袋は70～80袋ほど。誰かに破られ散乱するのではないか、火が発生したら…。地域の人にとって、ごみの入った袋が並ぶ光景が不安でならない。

飲料容器、弁当容器や箸、煙草の吸い殻などがあちこちに捨てられるのが日常となった伏見稲荷大社近辺。マナー啓発だけで解決する問題ではなさそうだ。伏見稲荷には、

世界各国から文化が異なる人々がやってくる。日本の道徳観に基づくマナーに従ってもらうのは難題とも言える。

「まずは、伏見稲荷大社、地域の市民、観光関連事業者が話し合う機会がほしい」。意見を交換し合う中で解決策が見つかるはず。「リユース食器を使ってはどうか」「どこかにイートインコーナーを設けるのも一案」などの発言から、切実さが伝わって来た。



閉店後、裏参道にはごみを入れたポリ袋が積まれる

京都市の観光政策の中でごみ問題は…。 マナーの徹底など解決を狙う策も。

ところで京都市の観光政策は？今後も観光客の誘致を目指すのだろうか？観光を担当する局としては、ごみに対して、どんな方策があるのか？急げ！京都市産業観光局へ。観光政策を行う観光MICE推進室^{※2}を目指した。

持続可能な国際文化観光都市を目標に掲げ、市民の安心安全、生活との調和などにも重点が置かれ、取り組んでいる。さらに宿泊税導入を機に観光インフラの整備、マナー対策の強化に取り組む模様だ。同室では、外国人旅行者向け、「京都のあきまへん」というマナーを伝える冊子を中国語と英語表記で発行しており、ポイ捨て禁止、路上喫煙禁止などを呼びかけている。この冊子は、JR京都駅案内所で入手できる。

京都市の宿泊客数は1415万人（平成28年）で、外国人は318万人、過去最高を記録した。今年10月から導入する宿泊税は、市民生活と観光の調和のため、マナーや混雑など観光に起因する問題解決に向けて地域の自主的な活動支援に活用する「地域と連携した観光と市民生活の調和推進事業補助制度^{※3}」を創設した。観光で問題を抱える地域の人々には願ってもない制度が、満足度の高い国際文化観光都市の実現に寄与することを願いたい。

観光に伴うごみ。人気スポットだけではなく、宿泊に関わるごみについても課題はありそうだ。これは次号で取り上げたい。

※2…MICEとは Meeting（企業のミーティングなど）Incentive（企業報奨・研修旅行）Convention（国際団体・学会が主催する総会）Event/Exhibition（文化イベント、展示会）の意味

※3…平成30年5月23日発表 京都市産業観光局広報資料



今や、宵山は“リユース”が当たり前 5回目を迎える「祇園祭ごみゼロ大作戦」

一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦

理事長 太田航平さん (特定非営利活動法人地域環境デザイン研究所 ecotone 代表理事)

理事 内田香奈さん (特定非営利活動法人きょうとNPOセンター 副統括責任者)

祇園祭一色に染まる7月の京都。一ヶ月にわたり様々な祭行事が繰り広げられ、多くの見物客が訪れる。特に前祭の宵々山と宵山(7月15、16日)には、600店を超える夜店や屋台が立ち並び、2日間で延べ50~80万人の人出を記録する。

そんな盛況の陰で、見物客数に比例して増え続ける膨大なごみの量。ごみ箱からあふれたごみが路上に散乱し、美観を損ねていた。しかし、2014(平成26)年からスタートした『祇園祭ごみゼロ大作戦(以下、ごみゼロ大作戦)』の取組により、初年度で約15トンのごみ削減に成功! 果たして、ごみゼロ大作戦とは……。今年で5回目を迎えるこのプロジェクトの取組と成果を追った。

リユース食器導入で15トンのごみ減量

57トン——これは2013(平成25)年の祇園祭宵山・宵々山の2日間に発生したごみの量。その7割は屋台や夜店、コンビニなどで販売された食品や飲料の容器包装ごみである。量の多さだけでなく、散乱ごみも深刻な状態、見物客からは「ごみ箱からあふれ出したごみの山にはげんなりした」といった声も聞かれ、ごみ対策が不可欠な状態だった。

問題解決に向けて動いたのは2014年春。約50年ぶりに「後祭」が復活するタイミングだった。「観光客を美しいまちでお迎えしたい」「神事や山鉦巡行の舞台を汚したままではいけない」「ごみを減らして環境への負荷を減らそう」。それぞれの想いを持った市民団体、NPO、民間事業者、露店商組合、行政などが呼びかけ合い協働して『祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会』を立ち上げた。排出されたごみをいかに処理するかではなく、「そもそも“ごみを出さない”仕組みを考えることが重要」と、2Rの視点を取り入れ、何

度も繰り返し洗って使える「リユース食器」を使ったごみ減量への取組をスタートさせた。

主な取組は、屋台等で使われている使い捨て容器をリユース食器に切り替える活動を展開し、お祭りのごみ減量を目指すというもの。初年度は、露店商組合の協力で、“約21万食分”のリユース食器の導入に成功。この結果、2014年前祭の宵々山・宵山に発生したごみの量は42トンと前年から15トン(2013年比26%)の減量。それ以降も取組開始前に比べ、減量を維持している。



お話を伺った内田香奈さん、太田航平さん

ごみ箱は置くことより“管理すること”が大切

「1年目はリユース食器の紛失が多くて、約2割が返ってこなかった」と話すのは、当時の同委員会実行副委員長で、現在は一般社団法人の理事長の太田航平さん。リユース食器の認知が低く、捨てたり、持ち帰ったりする人も多かったようだ。捨てられた食器を回収するため、ごみ箱の中まで探したが、初年度はこれまでの宵山の慣例として、約1400箇所に無人のごみ箱が設置されており、リユース食器の一部が廃棄されることにつながってしまった。以前

からさまざまな活動を行う中で「ごみ箱は設置するだけでなく、“管理すること”が大事」と学んでいたことから、2年目からは、関係各社にご協力いただき、ごみ箱は同委員会が設置するものだけに一本化し、これまで「缶」「ペットボトル」「その他」の3種類だった分別回収ボックスと一緒に「リユース食器」を回収した。祭会場には初年度32カ所のエコステーションを2年目には50カ所まで増やして全てにボランティアを配し、分別の誘導やリユース食器の回収呼びかけを行った。ごみ箱を管理することでリユース食器の紛失はグンと減少し、散乱ごみも大幅に減少

している。今年からは「割箸・串」の分別回収も追加。回収した使用済み割箸・串はペレットを作る際の燃料としてリサイクルする予定だ。

また、2年目からは京都駅でのPRイベント、昨年度か

らは、リユース食器に返却を呼びかけるシールを貼ったり、今年に関西空港でのデジタルサイネージを活用した情報発信など、広報活動にも力を注ぎ、「宵山のあたらしいお作法」の周知を図っている。

活動を支える2000人のボランティア

ごみゼロ大作戦の取組を支えるのは、ボランティアスタッフたち。初年度は1500人、2年目以降は2000人募集し、主にエコステーションでのごみ箱設置や、リユース食器の回収、ごみ分別の呼びかけ、散乱ごみの清掃などに当たる。1年目は、大勢のボランティアを束ねる役を運営本部のスタッフが務めていたが、2年目以降は、ボランティアリーダーを置くことに。リーダーは、事前の研修やミーティングなど準備段階から活動に関わり、本部スタッフとともにごみゼロ大作戦を作り上げていく。



ごみの分別を呼びかけるボランティアスタッフ



この資源物の分別率の高さ!これぞ活動の成果

リユース食器は後祭の屋台村でも大活躍

前祭で大活躍した「リユース食器」は、後祭の屋台村でも大活躍。今年も、京都市が京都芸術センターのグラウンドで、「エコ屋台村」(7月22日、23日)を開催。

イベント開催時におけるごみを減らし、リユース食器の活用促進をPRするため、全屋台でリユース食器を使用し、飲食を提供している。

最後に、太田さんは「祇園祭という多くの市民が参加する場で、なぜリユース食器を使っているのか、それを少し考えてほしい。来場者も、販売する人も、祭を作っている人もみんなが少しずつ意識すれば、散乱もなくなるし、ごみをもっと減らせると思います。最終的には、この取組が

なくても“ごみが出ないまち”になることが理想です」と力を込めた。



役目を終えて、回収されたリユース食器

今年のエコ屋台村では、すべての飲食屋台を「京都市食べ残しゼロ推進店舗」とし、食品ロス削減をテーマ(食べ残しゼロ、地産地消、まかない料理等)とした『もったいない屋台』を開設するとともに、鷹山保存会による祇園囃子の披露や華道男子グループ「IKENOBBOYS」のいけばなパフォーマンスなど、特設ステージにおいて盛りだくさんの演出を予定している。

藤原幸子(平成30年5月2日取材)

祇園を愛する人々と地域住民のためのまち ～ごみを捨てないで！マナー看板に込めた思い～

茶屋や高級料亭、飲食店が立ち並び、昔ながらの格子戸の続く家並みには、他とは一線を画した格式の高さと京都ならではの雅な文化を感じます。今回は、この祇園の街並み景観の整備と美化を推進する祇園町南側地区協議会の太田磯一さんに、近年、話題となっている観光客のごみ問題について伺いました。

祇園町南側地区協議会とは？

祇園町南側地区協議会（以下、協議会）は、平成8年5月に祇園町南側地区が京都市の美観地区に指定されたことをきっかけとして同年8月に設立。南側地区にお店を構える、または在住する約220店舗・世帯で構成されています。これまで、花見小路の石畳化をはじめ、私道の石畳化、街並みの保全・整備を推進。そして、これらの環境の整備に伴い、観光客、特に近年では外国人観光客が急激に増えていきました。



祇園町南側地区協議会 幹事
NPO法人祇園町南側地区まちづくり協議会 常任理事
太田さんが経営する廣東料理「翠雲苑」にて撮影

祇園のまちを大事に思っている！

最近話題になっている外国人観光客の急増について尋ねると、困った様子で話し始めました。「祇園はね、インバウンド消費で儲けようとか一切思っていないんです、本当に。ここは昔から私たちの生活の場であり、国内外の祇園の歴史や文化を愛する方が訪れる場なんです。石畳や電柱の地下工事も、元々は地域住民のためにはじめたこと。観光客を増やす施策ではないんです。」ごみ捨てのマナーについて尋ねると「確かに、ガムを道に吐き捨ててあったり、食べ物の包み紙が捨てられたりしていることは増えました。外国人向けに英語や中国語表記の看板を設置しましたが、あまり効果はないようです。」とがっかりした様子。どうしたら、マナーを守ってもらえますかと尋ねると「いや、そういう人はもう祇園には来ないでほしい」とキッパリ！



祇園のあちこちに建てられたマナー啓発の看板

祇園の美観を維持するには？



外国人観光客であふれる祇園花見小路通

清掃活動などの意義については、「私たちのように店舗を構える人たちは、皆、店周辺の石畳の清掃から始まります。ごみが落ちていたら、そこからまたごみを捨てる人が現れ、その連鎖はどんどん続いていく。そして、まちがごみだらけになってしまう。そうならないように、協議会メンバーが中心になって定期的な清掃活動も行っています。」さらに「私たちの地区には、街頭ごみ容器や吸い殻入れ、公衆トイレなど一斉ありません。つまり、ごみが捨てられないという点では、観光客にとって祇園は不便なまちだと思うんです。」

祇園に昔から住み、祇園を愛する人々と外国人観光客との意思の相違。東京オリンピックを目前に、協議会の取組は正念場を迎えようとしています。

高野拓樹（平成30年5月14日取材）

なごみ
日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●● 第18回 「このマップ、京都のJKが作りました (DKもいるでー!)」 ●●

目を引くタイトルの京都修学旅行口コミマップ、みなさんはもう目にされましたでしょうか？ 京都市立堀川高校の放送局メンバーのJK（女子高校生）とDK（男子高校生）が作ったA5サイズの冊子。修学旅行生が気軽に行くことができる安価なラーメン店やスイーツ店、インスタ映えスポットやおみやげなどがまとめてあり、地元の高校生ならではの視点が光ります。

年間110万人を超える修学旅行生が訪れる京都。そんな多くの修学旅行生の思い出に寄り添うために、3年前からこのプロジェクトはスタートしました。新京極商店街には、修学旅行生の意見を聞くためのメッセージボードが設置され、またKBS京都ラジオで京都府民の意見を募り、多くの情報を集めてきました。様々な口コミを元に、放送局メンバーが試行錯誤しながら

作り上げた思いのこもったマップ。ついに今年5月にお披露目となったのです。

その完成報告の場に司会として参加させてもらったのですが、放送局メンバーの表情はやや緊張もありながら、自信に満ちたものでした。「たくさんの口コミをもとに、より楽しんでもらうにはどうすればいいかを考えて、取捨選択していくのも難しかった」といいます。「それでも、京都の幅広い魅力をもっと知ってほしいという思いで制作に挑んだ約半年間、とても楽しかった」と彼女たちはとびっきりの笑顔で話してくれました。修学旅行生と同じ世代の地元の高校生が全力で作ったマップ。門川京都市長も第2弾も見てみたいと期待を寄せる絶賛ぶり。『京都のJK (DKもいるでー!)』の思いが全国に届きますように。



このマップを作成した堀川高校放送局のメンバーと一緒に

海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。 織りなす「もっぺん」物語



第 5 回

修理から洗浄まで、革製品を甦らせる 靴専科

景のお直し屋さん情報サイト『もっぺん』で「靴」のお直し屋さんは洋服に次いで多く「まるごと洗う」という店まで！今回はその中から、フランチャイズで全国展開する「靴専科」の河原町店を訪ねた。

もともとオーダーメイドの靴職人だった店長の角南さんがその腕と知識を生かし、かかとやソールの交換、傷んだ箇所の修理、色褪せた革の色補正やり・カラー（色変え）、クリーニングなど、それぞれの状態に合った方法で靴やバッグを甦らせてくれる。「革製品を洗っても大丈夫？」と問うと、同社開発の洗剤で栄養を与えながら洗浄し、専用機でじっくり乾燥させるので革を傷めることはないとか。除菌・消臭効果のあるオゾン水を使うので、汚れとともに臭いも軽減される。

修理依頼は幅広い世代からあるが、古着店で買った製品を「修理で何とかありませんか」と持ってくる若者が少なくない。裏寺町にあるこの店ならではの客層だろう。

ある時、「このバッグで財布を3つ作ってほしい」との依頼が。祖母の形見を孫三人で持ちたいのだという。久々に腕が鳴った。デザインは任せてもらい、3つの財布を仕上げた。この仕事のやりがいは「完成品を見た時のお客様の表情」だという店長が、「あの時の笑顔は今でも忘れられない」と振り返る。

「靴は一生もん」と店長は言う。革靴は長く履けば足にフィットして履きやすくなる。長く履くためには「連続して履かない（通気）」、「クリームを塗る（保湿）」など日々の心がけ、そして定期的なメンテナンスが不可欠。古くなったけれど、お気に入りだから捨てられない。そんな靴やバッグをしまいい込んでいる人は相談に行ってみては。



(上) 店長の角南竜也さん
(右) 革の洗浄と色補正で美しく生まれ変わった靴（見本）



▶ 靴専科河原町店 京都市中京区裏寺通り蛸薬師下ル裏寺町607 西川ビル1F ☎075-257-8992

▶ 靴専科北山店 京都市北区上賀茂櫻井町65 北山TDヒルズ101 ☎075-706-8692

藤原幸子（平成30年5月9日取材）

「せっけんづくり」はワクワクの宝庫

二条城の北西に位置する上京区出水学区は、女性会の活動がとて盛んな地域です。出水地域ごみ減量推進会議（以下、出水地域ごみ減）は、出水女性会を母体に、平成12年に設立されました。以後10年以上に渡り、二条城北小学校と連携しながら、廃食用油を利用した「せっけんづくり」を環境学習の一環として行っています。「せっけんづくり」を通して地域の子もたちに伝えたい想いを、出水地域ごみ減の会長 加藤アイさんと講師を務める高橋かつ子さんに伺いました。



加藤会長（左側）と高橋さん（右側）

油からせっけんができるんだ！

毎年、小学5年生を対象に行われる「せっけんづくり」は市民スクール21事業の一講座でもあり、多い年には100名もの子どもたちが参加する一大ワークショップです。体育館に集まった子どもたちは6班に分かれ、講師の高橋さんをはじめ、出水地域ごみ減のスタッフ20数名と一緒に、せっけんづくりに挑戦します。

せっけんづくりでは主に出水学区で集められた廃食用油を、18リットル入りのポリタンク4～5本分使用します。参加する子どもたちにも廃食用油の持参を呼び掛け、ペットボトルなどに入れて持って来てくれる子もいます。ラードなどの動物性油脂が混じると分離するので、必ず植物性油脂を指定します。せっけんづくりに必要な材料は、1班ごとに苛性ソーダ2本（1キログラム）に対し、油は7リットル、水2リットルの割合で準備します。苛性ソーダと油と水が化学反応を起こすと高温になり煙が発生するため、子どもたちは必ずマスクや軍手を着用し、やけどにも気を付けるよう呼び掛けています。せっけんづくりの作業は2時間程ですが、準備や片付けなど、出水地域ごみ減の皆さんの尽力は計り知れません。「会員の熱意と協力があるからこそ、小学生に喜んでもらえる授業が続けられています。皆さんには、とても感謝しています。」と加藤会長。

今年は6月15日に開催。当日の様子



好奇心を育てたい

京都市では、廃食用油を精製し、ごみ収集車や市バスの燃料（バイオディーゼル燃料）として有効活用しています。このせっけんづくりは、その原料と同じ廃食用油を使



材料を混ぜ合わせる作業は慎重に

い、子どもたちに資源を大切にする気付きと学びの機会を持って欲しいという気持ちで続けられています。普段口にして油からせっけんができる驚き、化学反応の不思議、そんな体験を通して環境や科学に興味を持つ子どもが一人でも増えてくれたらと願っています。廃食用油から作られたせっけんは、肌に優しく、それでいて食器や服の汚れをよく落とします。「なぜ汚れが良く落ちるのか？」「なぜ水を汚しにくいのか？」そんな疑問が、子どもたちの好奇心を育てます。「せっけんを作って終わり、というワークショップではなく、『なんでなんかな？』という気持ちを



できあがったせっけんを牛乳パックに流し入れ、1カ月ほど乾かします

大事にしています。」と高橋さん。子どもたちへの温かい眼差しが、とても印象に残りました。

門掃き、挨拶、人とのつながりを大切に

現在、出水地域ごみ減の廃食用油の回収拠点は11カ所。うち、3カ所はいつでも持って来てもらえるように常設されています。廃食用油の回収に加え、毎月第一月曜日の朝には各家庭で門掃きを実施、小学生の登校時間に合わせて挨拶をしながら、町内を美しく保っています。また年に一度、環境学習会を開催、昨年度は上京エコまちステーションの職員を講師に招き、京都市のごみの現状と、更なるごみ減量活動について学びました。

出水地域ごみ減の「自分たちが率先して学び、行動する」という信念が、地域の活力となり、より良い地域づくりの実現につながっているのだと感じました。

松村香代子（平成30年5月12日取材）